

パリ留学を他山の石として

稲賀 繁美 (人文学部)

夏期休暇ともなれば、語学講座参加や資料調査を口実にヨーロッパの学寮をあちらこちら梯子した。観光客で溢れる非効率なパリを逃亡し、ヴィーン旧市街の爛熟した雰囲気、湖れ、スイスの合理的な事務処理には感心を通り越して恐れをなし、エンジンバラやグラスゴーではスコットランドの人々の暖かさに感動した。解放以前の陸の孤島ベルリンでは国立博物館にほど近い郊外の一等地に別荘を宛てがわれ、自由大学の近代的な食堂に通うのが常だったし、ミュンヘンではフライジングでワインをしたたか飲んで最終便の郊外電車に転がりこんだが、まんまと寝過ごして乗り越し、朝まで線路づたいに彷徨したこともあった。はたまたお隣り中国では中山大学の食堂、紫荊園の逸品広東料理にすっかり味を占め、またの訪問の機を虎視眈々と窺っている。

最近では残念ながら大学の教官になってしまったためか、学生用の宿泊施設に入れてもらえないことも多いのだが、北米でシカゴ、ハーヴァード、インディアナなど、わずかではあるが滞在してみると、外国人学生、研究者の受け入れ態勢の整備されていることには、あらためて感心する。翻ってわが三重大学は、といった議論は、いまさらしたくもない。ただ、かつて外国で歓迎された幸福な体験は今日本に滞在している外国からの留学生とも分かち合いたいし、またいくつか配慮に欠ける欠陥と思われた事態は、できれば三重大学では同じ轍を踏まないようにして行きたいと思う。

すこしは実態を知ってもらいたいから書いてみる。留学生受け入れの先進国、亡命者の天国といわれるフランスだって、実情はなかなか悲惨なのだ。例えば滞在許可願ひ提出のための警察署詣。前の晩から寒風吹きすさぶなかを路上泊まり込みで列を作ってはじめてセーフとなるが、それでも書類不備で追

返されたりすると、もう忿懣を通り越して人生が空しくなってくる。それから大学の登録。これがちゃんと出来るぐらいならすぐさま卒業証書をあげても良いと、森有正が慨嘆したものも有名なくらいいややこしい。パリ市内あちこちに目印もないままに点在するいくつもの事務所を風潰しに駆け回らねばならぬのに、およそいつ行ってみても扉のまえは休みかストでなければ長蛇の列。珍しく開室だと事務のおばさんたちは殺気だっている。おまけに大学に登録できなければ滞在許可が降りないのに、滞在許可が出ない限り大学に登録できなかったりする。これこそ肌で実感できる実存の苦痛。花のパリ留学の楽しみとは、実はこうした形而下の苦しみこそあるようなのだ。所詮帰る国ある日本人など、およそ亡命なんかには縁なき衆生である。だがそんなおめでたい東洋の果ての国人とは違って、フランス官憲の窓口に殺到する非EC外国人の多数は、故国喪失者。フランス滞在の権利を獲得することは、まさに背水の陣、彼らの生存闘争の一環をなしているのだ。正当な権利といえども、黙って待っていて天から降ってくるわけではない。猛烈な自己正当化と自己主張なくしては、まっとうな権利だってけっして獲得も享受もできないのが常識という世界である。

こうした生存競争の果てに外国人たちは日本にやってくるのだが、かれらを受け入れる日本人たちはそんな生存競争の苛酷な現実など碌に知らないお目出度い人種ときている。文化摩擦が生まれないほうが不思議というものだ。文化摩擦おおいに結構。それが今日の世界を生きる楽しみだ。実際に留学生の指導に当たられたり、姉妹提携、学生交換派遣に携わってこられた方々の苦心談、経験談をこの欄でご披露いただいで、我々の糧としたい。